トークショー
「松村精一郎の生涯」

司会／良本知比路

パネラー／橘　勇一・中根伸一・内田博幸

司会：今から、松村精一郎についてのトークショーを始めたいと思います。皆さん、こんにちは。ようこそ富山へありがとうございます。私は司会を担当しています、良本知比路といいます。初めての担当なので、至らない点があろうかと思いますが、よろしくお願いします。

まず、自己紹介をして欲しいと思います。まず、富山聾史研究グループの代表の橘さんです。続いて、日本聾史学会副会長の中根伸一さんです。つづいて長野聾史研究グループ代表の内田幸さんです。それではただ今からトークショウーを始めます。最初に松村誠一郎さんについて橘さんからお話してもらいます。

橘：橘です。よろしくお願いします。12時まであと40分しかありません。その為、まとめてお話ししたいと思います。ご了承ください。皆さんの中には、初めて聞いたという人、もう知っているという人もいると思いますが、どうか、私の話をご静聴下さい。

ご存じのように、松村精一郎は、日本初のろう者の校長先生です。この、ろう者の校長というのは、今までの調査で３人いるとされていました。新しい調査でもう1人いると言うことが分かりました。ですから、全部で４人という事になります。他にもいるかもしれません。今後も引きつき、皆さんの協力も得ながら調査していきたいと思います。

最初に小岩井是非雄校長、松本ろう学校校長です。続いて北海道の辻本茂校長、この先生の研究は中根さん、小岩井先生は内田さん、松村先生は私橘です。この３人で説明します。４人目の校長というのが山口県小林校長です。写真がありますのでスライドを見てください。この先生については私たち３人が研究するのは困難なので中国・四国地方の方が誰か研究をして欲しいと思います。皆様方からも呼びかけて欲しいと思います。

松村先生について書いた資料集は受付にあります。写真があまりなくて２枚しかありません。娘を抱いている写真と、今スライドで紹介している

写真の２枚だけです。大変貴重な写真だと思います。

このスライドの方は、松村さんについて研究している方です、松村栄吉さんといいます。10年前に研究を始めるときに相談のってくれた方です。伊藤政雄会長と同じぐらいの年齢かなと思います。80歳近くの方です。ここに来てもらう予定だったのですが、体調が悪くなったということで来てもらうことができませんでした。

明日の探訪ツアーの時に一緒に案内してもらう予定です。現地でお会いできれば良いと思います。富山ろう史研究グループでバスツアーを企画し現地に行きました。明日、皆さんと一緒に行きますがその時と同じ内容の予定です。松村先生の家系の中で数少ないご存命のかたです。できるだけお元気なうちに何度も足を運んで松村さんの事をお聞きしたいと思っています。

このスライドは、松村家の系図です。精一郎さんは兄弟２人でした。兄は聞こえる人ですが、兄の子供の娘さんが結婚して出来た息子の子供が栄吉さんです。家系図には精一郎さんの子供さんが載っていませんがどこか遠くに行かれたようです。

それで、この栄吉さんからいろんな情報をいただいているわけです。時間が無くて詳しく説明できませんが、ホワイトボードに書いて説明したいと思います。精一郎の生まれたのは江戸時代で嘉永２年です。６歳の時に天然痘にかかり体中に発疹がガ現れ、生死をさ迷ったわけですが、両親の看護で何とか生き延びることができました。

その結果耳が聞こえなくなり足も不自由にな重複障害者になりました。それまでは、本を読んだりするのが大好きでした。みんなと一緒に凧揚げ

などをして遊ぶことなく熱心に本を読むような子供でした。耳が聞こえなくても知識の豊富な子供でした。母親は26歳で亡くなりました。

父親は身体の弱い精一郎の事を思い、耳が聞こえないが、本を読む為の目があり、字を書くための手がある。母親ゆずりの身体がある。学問に親しむようにさせたいと願い、岩永塾園という人を先生につけました。

どんな方法で勉強していたのかよく分からないのですが、お盆に米ぬかを敷き詰めてそこに字を書き、書いては消す書いては消すして勉強をしました。足が不自由なために学校へ行くことができませんでした。また、聞こえないためにコミュニケーションも不自由でした。家庭で岩永先生に一対一で指導を受けました。先生はゆっくりとしゃべったり手のひらに文字を書いたりしてコミュニケーションをしました。そのお陰で賢く成長するわけです。

それから、永山という友人がいるわけですが、今は南砺市になっていますが、合併前は福光と言うところです。この町は金沢とも交流がありました。山を越えるとすぐ金沢です。文化的にも交流があり、いろんな情報を得ることができました。岩永さんと永山さんは友人だったわけです。

松村さんは岩永さんから永山さんを紹介されるわけです。永山さんは障害者に理解があり医学や英語に堪能でした。永山さんから指導を受けて成長するわけです。それから永山さんから医者の稲垣さんを紹介されます。東京の楽善会、今は筑波大学附属のろう学校がありますが、その元になった盲唖院です。

そこの先生で中村正直という先生がいました。その先生について勉強を始めるわけです。皆さんご存じのように京都盲唖院が明治11年に開校しますね。東京の学校は明治12年に開校します。

毎日勉強していても仲間がいず寂しい思いをしていましたが、盲唖院の見学をしてびっくりするわけです。聞こえないこどもたちが積極的に話している様子を見て富山や北陸にそのような学校が作れないかと思い、努力するわけです。中村正直さんからいろいろ学び、金沢で学校を作ろうとするわけです。

しかし、聞こえないと言うこともあり１人でお金を出してやると言うことは経済的に無理なわけです。それで兄弟にも相談するわけです。親類などの援助も受けて明治の13年に盲ろう学校を設立するわけです。生徒を集めるわけですが、家庭訪問をしながら生徒を集めるわけですが、なかなか理解を得られず、断られることが多く結局５、６人生徒が集まっただけでした。

明治13年に設立したわけだけれども、明治15年頃はコレラが流行するなどの影響もあって、学校に通う子供達が減っていき、経済的にも非常に苦しくなり、社会的な援助も受けられなくなり、学校の経営がうまくいかなくなってしまうわけです。それで、金沢の教育委員会に救済をお願いするわけですが、それでもうまくいかずそれから１年後には閉鎖することになります。

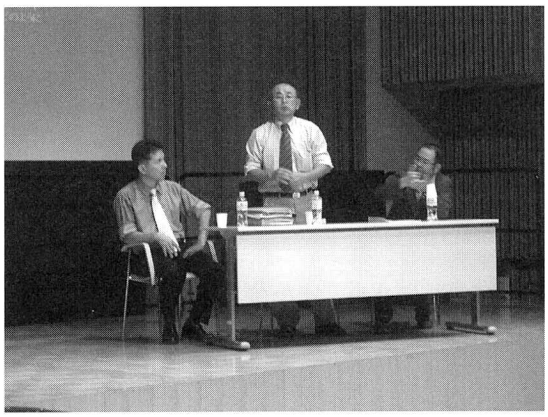
その後は福光に帰り、塾を作り勉強のできない子供達を教えたそうです。時間が無くて省いて話しをしましたけれども、これは娘を抱いた松村さんの写真です。この写真には勉強を教えてもらった先生もいます。米ぬかに字を書いて教えてくれた先生です。東京の盲唖院の校長先生、一番左側は古河太四郎先生です。いろいろ学んだ経過をスライドで現してみました。北陸の地にも盲唖学校を作らねばと決意するわけです。

金沢盲唖院の資料です。友達に出した手紙です。病気が流行したのはコレラでした。病気の流行を示す文書です。米の流通の商売をしていたのですが、景気が悪くなって、経営が厳しくなったときの文書です。この様な文書が３部残っています。

明日のツアーに参加できる人は生の文書を見ることができます。郷里に帰ってきた時、新しい橋ができるのですが、その橋に名前をつけて欲しい

と近所の人達から頼まれるわけです。鉄でできた珍しい橋です。これは大正のころの写真です。豊栄橋と命名します。橋を利用して生活が豊かになるようにという気持ちを込めて命名しました。この橋については、松村精一郎さんが名前をつけました。ろうあ者が考えた橋の名前ということで、うれしく思いますね。

松村さんの親戚に有名な方がおられました。家も近くで政治家です。生まれた時期が違いますが、34歳の年齢差がありますが、小さい頃松村精一郎に可愛がってもらったかもしれません。大きくなってから政治家になり厚生、大臣文部大臣を歴任します。今は福田首相の前任の安部前首相のおじいさんである岸元首相と首相の座を争った方で日中友好に力を入れた方です。



亡くなって１年後に日中友好が実現するわけです。新潟出身の田中角栄が首相になり実現したのです。資料提供してくださる人は、このおじいさんしかいない状況ですが、松村謙三氏と精一郎さんとの関係を調べていくのがこれからの宿題です。

これからも情報交換しながら調べていきたいと思います。皆さんのご協力もお願いします。丁度15分経ちましたが、手話が早くて申し訳なかったと思いますが、詳しい資料集がありますので買っていただいて読んでいただければ幸いです。

司会：お話しいただいてありがとうございました。とても分かり易いお話でした。何か気づいたことがありますか。パネラーのみなさんいかがですか。

中根：北海道の札幌の中根といいます。松村精一郎さんについてとても精力的に研究されていて、とても感銘を受けました。今から30年ぐらい前になりますけれども教育関係のろう史学会の書籍

などを調べてみますと、そのような内容は全く掲載されていなかったですね。東京のろう史学会の第三回でしたか、第２回のろう史学会の時に橘さんが参加してろうの校長先生がいたということを聞いて嘘じゃないかと思いましたが、本当に正しかったと言うことで当時私が調べたころは全くそう言うことがのっていなかったわけです。

ろうの歴史を調べていても聞いたことがなかったのでとてもびっくりしました。そう言うことを探し当てたことはとても大きな功績だと思います。健聴者もびっくりするような研究だと思います。今までの歴史の記録を塗り替えていくような業績を上げたのは富山のろう史学会の皆さんだと思います。とても感動しました。あなた方は歴史を変えたことです。本当にお疲れ様でした。

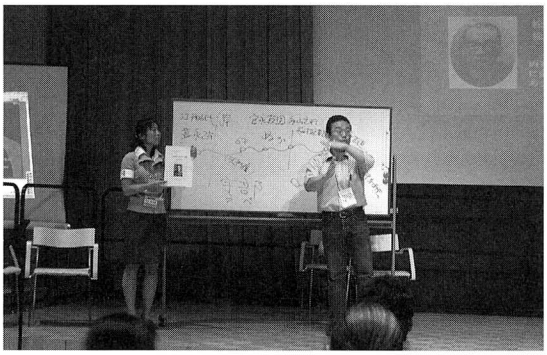
内田：ろう者の校長先生は、筑波大学附属ろう学校長の辻本校長先生と松本ろう学校の校長先生と今までは2人だったんです。東京でろう史学会があったときに橘さんが発表され驚きました。

橘：富山のろう史グループが発見したわけですが、助言してもらった先輩達にありがたいと思います。全国各地いろいろあると思いますが、先輩達が研究してきたことから学んでいく必要があると思います。どうもありがとうございました。

中根：ろう者の校長は４人でその内の１人で松村さんが明治の始めに設立したわけですが、その他の３人は、昭和３年です。昭和３年に学校設立していくわけですが、どうして３年なのかと言いますと教育が大きく変わるわけです。それまではろう学校は手話での教育をやっていたんですけど、川本先生が口話教育が必要だと言って、全国の教育のやり方を変えさせたわけです。口話と手話の

論争があったわけですけど昭和の３年には同じようにろう学校ができた歴史があるわけです。

口話教育が拡がったときに３人のろう者の校長先生がいたと言うことはどうしてなのか、もっと背景を調べる必要があると思います。近畿の方もそのあたりを詳しく調べたという話しがありますので、報告して欲しいと思います。



山口等も戦災にあうわけですが、辻本校長先生が昭和29年に辞められる。それがろう者の校長先生の最後になるわけです。しかし、４人の校長先生が今までいたと言うことは誇りに思って良いと思います。山口県の様子はどうですか、山口の皆さんの報告をお聞きしたいと思うんですが。

新谷：先程中根さんから言われましたが、京都から来ました、新谷です。皆さん御苦労様です。松村先生の研究大変素晴らしいことに思います。

山口県でもろう者がろう学校を設立したんですが、その場所は下関ですが、宇部の近くです。大阪で生活していた人で、京都ろう学校の同窓会名簿に名前が載っている人です。つまり京都ろう学校を卒業した人です。その後山口に来て小さな学校を設立したわけです。

宇部と言うところは石炭で有名ですね。石炭の採掘場でろうあ者も働いていたと言うことなんですね。そこで働くろうあ者に勉強を教えたことがきっかけらしいです。今のところ分かる範囲でお話をしました。

司会：どうもありがとうございました。４人目のろう者に校長先生と言うことでいろいろ話しをしていただきました。校長先生が４人いたと言うことですが、教頭先生にもいたと言うことです。

内田：先程中根さんが言われた、教育改革についてですが、この写真の真ん中におられる先生が山中先生です。教頭先生です。職員の出勤簿なんですが、この中に山中先生という女性の教頭先生がいるわけですが、その方もろう者の先生です。

橘：先程中根さんが教育改革を行なったという話しでしたが、誤解の無いようにして欲しいのですが、社会がまだ発展していない時にろう学校が建てられたことはまだまだ社会的には違和感があった。口話教育をやって欲しいと言うことででろう学校が建てられたわけではないと思います。

ろう者が京都ろう学校で教育を受けている姿を見て、ろう者自身が学校を建てる必要があったのでしょうか。

東京のろう学校には先生になるための学科、師範科があったわけですが、ろうの先生もそこに入って学ぶことができたわけです。師範科を卒業すると教員になる資格を与えられたわけです。それは、長野であるとか富山県も同じであると思います。師範科を卒業した方は全国にたくさんおられると思うんですけど、100人以上そのような方がおられると聞いております。

司会：そろそろ終わりの時間が近づいてきましたが、感想などいただけるでしょうか。

中根：みなさん、ご理解いただいたと思いますが、戦前のろう教育について調べようとろう史学会の会員は熱心に行なっていますが、いろんな記録を残すことは大事だと思いますので皆さん方も研究して欲しいと思います。昔のろう学校でろうの先生がどういう状況にいたこと言うことを調べたいと思います。

司会：最後にまとめをお願いしたいと思います。

中根：ろうの校長先生がいたと言うことはみんなの誇りだと思います。二つめはいろいろ調べてそれを発表する場があるということは大変良いと思います。そのような場がないとなかなか話しが進まないと思います。それから、来年は是非浜谷さんが論文を発表して欲しいと思います。また、教頭先生についても調べて欲しいと思います。

内田：全国の同窓会の歴史なども調べて発表したいと思います。もっと若い人達が参加するようにして欲しいと思います。後輩達がどんどん育つように頑張って欲しいと思います。

司会：時間が来ましたのでこれでトークショーを終わりたいと思います。司会がうまくできなかったかと思いますが、どうもありがとうございました。